歴史地震
第36号 (2021) 275頁

［講演要旨］

東海地域における南海トラフ沿いの歴史地震津波に関する現地調査結果について(その2)

久永哲也*(1)・内田篤貴(1)・椋代大暉(2)・佐々木哲朗(2)・小川典芳(2)・浦谷裕明(3)・武村雅之(4)・都築充雄(4)
(1)日本物理探鑛株式会社 (2)中部電力株式会社 (3)中部電力パワーグリッド株式会社
(4)名古屋大学減災連携研究センター

§1. はじめに

南海トラフ沿いで発生する地震について，2011 年の東北地方太平洋沖地震を契機に，内閣府によりあらゆる可能性を考慮した地震・津波の検討がなされ，過去の歴史記録を上回る最大クラスの地震・津波が想定されている．一方で，2011 年の東北地方太平洋沖地震の仙台平野における津波記録について，過去に同規模の津波があったことが報告されており(菅原・箕浦，2013)，歴史記録の重要性が再認識されている．筆者らは，南海トラフ沿いの歴史地震による地震・津波像について理解を深めるために，明応東海地震を中心に現地調査等を行ってきた．本報告では，南海トラフ沿いで発生した地震のうち，明応東海地震と安政東海地震の地震・津波記録について，被害記録や伝承にある地名に着目した調査結果を報告する．

§2. 東三河地域における地震・津波の調査結果

(1)愛知県蒲郡市竹谷町の白山社

『神社に関する調査(宝飯郡)』に，「明應八年海嘯ニヨリテ社殿流潰セシガ神夢ニヨリテ雀ガ森ヨリ今ノ地ニ遷リ給フト傳フ(中略)雀ガ森トハ字油井ニアリシナリ」とされる．この伝承に基づき，都司・他(2013)では，「現在の蒲郡市竹谷町由井浜に当たり，(中略)浸水高4.1m」と評価されている．調査の結果，白山社旧地の「雀ガ森」について，『塩津村誌』(1951 年版)では，「藤原俊成卿は竹谷雀ヶ森というところにおられた．今の専売所西方約一丁位のところであろう」とされる．この「専売所」は，1953 年頃まで残されていた塩の専売所であり，『吉良の塩田』からその所在地を確認した．この専売所から西に一丁(109m 程度)の位置が，明応東海地震時に白山社が鎮座していた「雀ガ森」(標高 3m 程度)であると特定した．また，この白山社は津波により「流潰した」とあるが，石川県の白山から持ってきたというご神体の岩石が現存していることから，社殿一切が流失するような被害ではなく，大破する程度の被害であったと考えられる．木造建築物が流失を免れたとすると，浸水深は 1～2m 程度であったと考えられ，浸水高は 4～5m 程度と考えられる．

(2)豊橋市牟呂吉田町の素盞嗚神社

『三河国牟呂吉田村素盞嗚神社由緒』に「明応七年六月，地震津波の為流失．現在の地に移転(昔は西北ニアリ)ス」とされる．この伝承に基づき，都司・他(2013)では，現在地西北の水路に面する地点とし，浸水高 5.3m としている．調査の結果，『牟呂村由来記』に素盞嗚神社は開元親王をまつったもので，かつては現在地から未の方向，「西の濱」というところにあったとされる．ここで，『牟呂史つれづれ 創刊号』によれば，「牟呂台地の古地形は，江戸時代中頃までの新田開発が行われる以前は，北に豊川，南に柳生川が台地にほぼ接して流れ，東から西に向かって三河湾に突き出た半島になっていた．この半島の縁端部やその裾部には数多くの貝塚が分布している．(中略)貝塚群の年代は，約四五〇〇年前の縄文時代中期から一五〇年前の江戸時代後期にまで及び」とあり，江戸時代中頃まで牟呂台地は三河湾に半島状に突き出していたとされる．通常集落内部に形成される貝塚が台地の外縁部に確認されていることから，台地の外側(西側)の浜が「西の濱」であったと考えられ，素盞嗚神社は同地にて明応東海地震津波により流失，現在地に移転したと考えられる．

(3)豊橋市伊古部町のささゆりの里

ささゆりの里に「震災，鎮めの石碑」という石碑が建てられ，その案内板に，安政東海地震津波により，「推定 29m の高台まで海水が上がった」とされている．この石碑と案内板を整備された「笹百合保存会」の田中会長と伴氏への聞取り調査の結果，この「高台」は東観音寺元屋敷の庭のことで，そこまで津波が上がったという伝承による，とのことであった．東観音寺は，宝永地震で被災・移転しており，『三河国名所図絵絵解き散歩』によれば，旧地は老人ホーム北側の小さな林の中に当たり，行基菩薩開山を示した石碑が残されている，とされる．標高 17m 程度の旧地には大きさが約 1m の同石碑が現存していることから，流失しない程度の津波高であり，その高さは 18m 程度以下である可能性が考えられる．

§3. まとめ

今回の現地調査の結果，旧地名や通称地名であったために場所を特定できていなかった地点について，歴史地震資料に限らず資料を確認することで，場所を特定することができた．このことから，広い視野を持って資料を検討することが，歴史記録を防災・減災に役立てていくためにも，有効であると考えられる．

§4. 謝辞

調査にあたり，情報提供いただきました，笹百合保存会の田中氏ならびに伴氏に深く感謝いたします．